

北宋前期開封における燕文貴山水の形成

—大阪市立美術館所蔵「江山樓觀図巻」を中心に—

前田佳那

燕文貴は呉越国に生まれ、北宋宮廷に仕えた山水画家である。1970年代以降、本画卷は北宋後期に至って地方様式を集大成したと目される郭熙「早春図」の準備段階を示し、華北山水画と江南山水画の両要素をもつ山水画であるという認識が共有化されてきた。しかし、燕文貴の活躍した北宋前期における地方様式としての華北・江南両者間の関係は未整理のままで、具体的に本画卷のなにが華北或いは江南的要素であるのか、先学の研究においては見解が一致していない。北宋前期の都開封という燕文貴が制作をおこなった文脈へと本画卷を戻してゆく方法については未だ考察の余地がある。

本画卷は小画面の紙本であり、構図については画卷形式における展開性が着目されてきた。しかし、南宋院体画にみられる近接描写とはまた異なる画面前景に展開してゆく構図感覚や、点景の配置によって空間の奥行きを提示する仕方、当該期の都開封において共有化されていた山容モチーフを組み込む点など、他の画卷にみられない特徴をもつ。こうした構図の機能は、画卷としての様式的特徴からのみにとどまらず、燕文貴の昇進に関与した宦官劉承規や皇帝を中心とする前期宮廷の嗜好および壁画制作の文脈から解釈される必要がある。

さらに、本画卷は不定形モチーフである風雨表現や一日のある時間の流れが精彩にあらわされている。自ら何ら言葉を残し得なかった燕文貴の作画意識を知るためには、前後する時期に宮廷内外で行われた、宋迪による瀟湘八景図や惠崇による小景画の創始にみられる、風光明媚な江南の景観を都開封において定形化された造形語彙を用いてあらわす一連の絵画的試行と併せて検証されなければならない。燕文貴は宮廷画家として地方様式を統制する中央政権の要請に応えていたのであり、北宋前期における山水画の試行の多様性を担保する作業の一部として、燕文貴が制作をおこなった地点をめぐる複層的な文脈から本画卷を再検討したい。